ATSUKO KUDO MAILMAGAZINE 169

2011.02.06 ●Kadosh ●Harvor Mission

ドイツへ戻ってから約一カ月が過ぎました。一月中は、昨年、膝の故障で思うように出来なかった家の整理と掃除にかなりの時間を要しました。それでもコンサートがない分、静かな主との交わり、そして待望の聖書の学びを開始することができました。

●Kadosh（聖なる）

実は、昨年の日本でのコンサート・ツアーの間も、大阪滞在時には、一日 1～2 時間の聖書の学びをキープするようにしていました。それは、一年前からみことばへの大きな飢え渇きを覚えるようになり――というのも、ドイツのキリスト教出版協会から出されている原語の意味の注解付きスタディーバイブル（Elberfelder Studienbibel mit Sprachschlüssel und Handkonkordanz）と共に聖書を読むようになってから、みことばへの理解に大きく目が開かれるようになったからです。そうすると、旧約聖書から新約聖書を、もっと明確に読み解けるようになって行きました。そして、神がどのようなお方かを具体的に知るようになり、知れば知るほど、私が礼拝賛美するこのお方を、さらにもっと知りたいという渇望が大きくなって行ったのです。

今、『出エジプト記』の「幕屋」の箇所を通して、礼拝の真髄を学んでいます。「わたしが聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」と仰せられる神は、そのままでは神のみ前に立つことのできない罪人のところへ降りて来られ、どのようにしたら聖なる者とされて聖なる神に近付くことができるか、「幕屋」を通して、その方法を教えてくださいました。

そして新約の時代に生きる私たちは、本物の幕屋であるキリストを通して大胆に神に近付くことが出来ます。だからこそ、神が聖であるように、聖なる者として、ふさわしいあり方で主を礼拝賛美させていただきたいと思うのです。1 月から改称した「ワ―シップ・ミニストリーズ」の働きが、自分の中で、霊的に具象化されて行くのを感じています。

●Harvor Mission（船員伝道）

メルマガ145号 http://atsukokudomm.com/pdf/145_20090915.pdf でハンブルク港で船員伝道をしているマーティン・オットーのことを紹介させていただいたことがあります。マーティンは、私が1987年にスペインからドイツに開拓伝道に来た当初、言葉の困難さに落ち込む私を励ましてくれた人です。励ましのことばだけでなく、マーティンの幼子のように純粋な信仰と、愛に溢れた姿そのものが、周りの人々に力と励ましを与えてくれるものでした。マーティンとは、その後20年近く会う機会がありませんでした。

そのマーティンが、先週の日曜日、私たちの教会に、宣教報告に招かれてやって来たのです。20 年前の「少年伝道師」のイメージから、「高貴な伝道師」の風貌へと変えられたマーティンに再会。しかし、主をこよなく愛し、主に忠実に従い、キリストの愛と救いを涙とともに伝えてきたマーティンの情熱と幼子のような純粋な信仰は、20 年前と全く変わっていませんでした。

マーティンは、船員たちのことを、Seevolk「海上民族」と呼んでいます。数か月間、海の上で生活しなければならない船員たちは、その間、家族が病気になっても、親が死んでも帰ることができません。孤独感に悩まされ、酒びたりになり、船員同士の殴り合い、性的誘惑、海賊の襲撃・・・と、「海上民族」の生活は、私たちの想像を絶するほどに大変なものです。

「ぼくたちの働きはみことばを届けること。救ってくださるのは神」。だから、マーティンとスタッフは、今も毎朝早く、ハンブルク港へ行って、聖書、書籍、ジーザスフィルムなどの配布を続けています。イスラム教徒も、仏教徒も、もらった聖書を通して、これまで「海上民族」の多くがキリストの救いに導かれて来たそうです。

そして近年は、彼らの働きを通して、パシフィック・チャーチ（海上教会）が誕生するようになりました。日本の某大会社の貨物船にも、パシフィック・チャーチが出来たそうです。殴り合いのけんかも、泥酔することもなくなり、みことばの学びと礼拝を通して人格が変えられて行く船員たちを見た船長と社長は、クリスチャンではありませんが、パシフィック・チャーチの働きを大いに推奨しているそうです。

「海上民族」こと船員たちの救いのために、パシフィック・チャーチが多くの船で行われるように、マーティンの働きのために、どうぞ覚えてお祈りください。

〜〜

それでは、2 週間後に次回のメルマガを送らせていただきます。

皆様の上に、主の溢れる祝福がありますように！

Atsuko Kudo